

後付けの依頼状

一号かぎりの編集を引き受けることになって、他の委員とあれこれ話をしながらありうべき企画を練っていたとき、私には具体的な案と呼べるものがなにひとつ浮かんでいませんでした。ただ、硬くなった脳の筋肉をほぐし、視点を少しずらして、目の前の言葉に向き合ってみよう、そのために座りやすい恰好になっている足を組み替えてみようと、ぼんやり考えていたにすぎません。百八十度立場を変えるところではありません。左に一步、右に半歩、上に十数センチ、下に数十センチ。ほんのわずか身体を動かすだけで、見えてくる景色はちがってきます。なら特別な話ではありません。

しかし、瞬間的な微調整がなされても、目の前の景色がどの程度、またどのように変わったのかについて自分の言葉で表現するには、かなりの忍耐と持続力が必要です。立ち位置をずらす間合いと幅は、その時々自身の判断であると同時に、ながい時間をかけて育ててきた、いわば遅効性の言葉の瞬間的な発露の結果だからです。だれかに誘われたり強いられたりして意識的に組み替えをおこなう場合でも、それは何周か遅れでかち合った即効性のある言葉に、遅効性の言葉がただしく加担したと考えるべきでしょう。問題は、両者を思考回路の根に生やしている書き手が、かならずしも多くはないということです。

そこで、この両面の言葉に道を開いていると以前から感じてきた方々に、編集部を通して思いを伝えてみたところ、それぞれが、それぞれの間合いで、長短二種類の波長をまぜあわせた新しい光の可能性を示してくださいました。以下、扉に付したのは、回答としての原稿に目を通してたあとにわきあがってきた想いを後付けした、架空の依頼状です。